

幼児の主体性を育てる保育 —表現活動を通して

相澤 恵美*・黒岩 仁美*・鈴木 晴恵*
原田 育美*・松村 和子**

Key Words : 5 歳児, 創作劇, 主体性

はじめに

幼稚園には、運動会や作品展、生活発表会（お遊戯会、本園では子ども会）といった、保育の成果を保護者に見せるという形の行事がある。本園では、従来のそういった行事のあり方を見直し、「見せるため」に練習をして保護者に結果を評価されるという行事のあり方から、行事は毎日の園生活の中から生まれ、子どもたちがそのプロセスの中で様々な経験をし、学びを得ていく活動の、ある通過点としての「見せる日」とであると捉えている。いわば、結果重視から、プロセス重視への変換である。2009年度の年長組は、「世界を知ろう!」というテーマを持って1年を過ごし、運動会、作品展、子ども会（創作劇上演）という行事を経験する中で活動を広げていった。本稿では、特に園生活最後の2月に行われる子ども会での創作劇上演を取り上げ、5歳児年長組96名が「世界の国々を知る」、「協同で一つのものを作り上げる」という経験に主体的に関わっていく様子を報告する。（松村）

1. 一年間のテーマ 「世界を知ろう!」

本園では、「誠実」「勤勉」「仁愛」という教育目標を掲げ、子ども達が「真剣に、じっくりと」取り組む姿、「よく動き、よく考える」姿、「思い合う、助け合う」姿を普段から大切に、1人1人の子どもとかかわり保育をしている。

* 文京学院大学ふじみ野幼稚園

** 人間学部児童発達学科

今年度、5歳児年長組では「世界を知ろう！」というテーマを掲げ1年に渡り世界のあらゆる事について映像や本でみたり、実際に体験したりする中で学んでいった。（鈴木）

2. 年間を通しての保育者の環境設定と子どもの活動

（子どもの活動はイタリック体で表記）

4月年長組進級当初、子どもたちが世界の国々の名前を憶えては言い合ったり、調べあったりしている姿から、1年間の指導計画を作成するときに、「運動会の表現（パラバルーンを使った身体表現）は世界の国をテーマにしてみよう」ということになった。ここから発展して、2月の子ども会までに次のように保育者の環境設定や子どもの活動が行われた。

4月 年間指導計画にて、運動会で世界についての表現をパラバルーンで行うことを決定。

5, 6月

子どもたちが世界について興味を持ち、知ることができるように国旗カルタや図鑑、絵本をコーナーとして設定。

一部の子どもたちが、家庭で興味のある国の事を調べてくるようになる。

7月 誕生会の保育者の出し物で、「世界のこんにちは」を紹介。園のイングリッシュタイムで知っている英語以外の言葉での「こんにちは」を、ペープサートを使って視覚的にも伝え、違いに気がつけるようにする。

子どもたちは言葉の違いに気がつき、それを覚えたり、「日本語のこの言葉に似てる」と発見したりして、言葉遊びをするようになった。

11月の作品展、2月の子ども会でも運動会に続いて、世界をテーマに表現をしていくことを保育者で決定。

世界の時差、住まい、人口などの違いを紹介するコーナーを設定。

9月 パラバルーンの導入として、映像で、各地の建造物や生活している場の違いを伝える。

10月 運動会では、中国は食べ物やカンフー、フランスはエッフェル塔、南アフリカは動物、アメリカはディズニーワールドのイメージをパラバルーンで表し「パラバルーンで世界旅行」を成功させる。

11月 作品展では、運動会で体験した国々を運動会で表現したそのままのイメージでダンボールや画用紙や布などを使って形にし、展示。

作品展で、保護者にたくさん褒められたことにより、ほとんどの子どもたちが幼稚園以外でも、家庭で見ているテレビ番組やニュース、本で世界のことに目を向け、知識を増やし、そのことを保育者や友だちに話すようになった。

貧困により教育が受けられない、食べ物がない、両親が戦争によりいないなどの子どもたちがいることを知らせるコーナーを設定。

12月 全員に再度、様々な状況で暮らしている子ども達のことを伝える機会を設け、自分たちができることを一緒に考える。

保育者からの提案で園庭の銀杏を拾い、保護者に販売する銀杏屋を行い、その売り上げ金をユニセフに寄付。(黒岩)

3. 子ども会での創作劇上演に向けて

前述したように、今年度5歳児年長組では「世界を知ろう!」というテーマを掲げ1年に渡り世界のあらゆる事について映像や本でみたり、実際に体験したりする中で学んでいった。この96名の子ども達と劇づくりをするにあたり、次の3点を大事にした。

- ①子ども達と活動をつくっていく
- ②今までの経験から子ども達が感じたこと、得たことが組み込めるように
- ③普段から興味を持っていることや得意な事を披露し表現できる場に

以上3点を大事にして、子ども達が主体的に子ども会に参加できるように非常勤職員も含めた保育者集団の中で共通理解をした。

そして、子どもたちが主体的に取り組むという点においては、次の2点を確認した。

- ①4つの係りを設定。

子ども達が自分の意見を言え、友だちの考えや発言を聞ける環境として、96名の子ども達での話し合いでは難しいという結論に至った。そこで、“話を作る係り”“衣装を作る係り”“背景や道具を作る係り”“歌を作り音響を考える係り”と大きく4つの係りを設け、子ども達が自分でやりたい係りを選び、積極的かつ主体的に活動に取り組めるようにしていった。

- ②劇上演中に裏方も務める。

劇の上演に際し、その場面に出ていない子ども達も何かもっと参加できる方法はないかと考え、以前影絵に興味を持っていた姿からOHPを使用したいと考え、場面転換の際にOHPを使うことにした。又、遊びの中でピアノを弾き楽しむ姿や、友だち同士で教えあう様子が見られていたので、BGMとしてピアノも子ども達が弾くことにした。その他、背景を変える、道具を動かす等、全ての子どもが役以外にも、裏方として自ら得意な分野で劇に参加できるようにした。

この①と②の詳細は、次節を参照のこと。

(鈴木)

4. 劇の創作・上演に向けて

1) 子ども会までの子どもたちの姿

①ストーリーの方向を決める、係りを決める

子ども達は、現在までに3年間または2年間の園生活を経験し、3学期には子ども会があることを知っており、自分達も年少・年中の時に年長組の創作劇を見せてもらっている。そこで、冬休みに入る前に保育者が子どもたちに、子ども会で演じてみたい話を考えてきて欲しいと提案した。3学期が始まり、子どもたちにどんな話を考えてきたのかをクラスごとに聞くと「タイムマシンにのってどこかに行く」「冒険する話がいい」「魔法使いが出てくる話がいい」と様々な意見がでた。その中で「困っている人を助ける話がいいよ」というアイデアを出した男児がいた。

運動会から世界のことについて学んできて、2学期には银杏屋を開店し、売り上げをユニセフに寄付し、世界には困っている人がいるということを知ったこともあり、保育者側としても「困っている人を助ける話になるといいな」と予想していたので、その男児の意見を取り入れることにした。そして、みんなで創作劇を作りあげていくことを伝え、一人ひとりが十分に力を発揮できるように、話づくり、大道具、衣装、歌の4つの係りを設定し、子どもたち自身がどの係りになるかを選べるようにした。

②係りごとにわかれて

まずは話づくり係り（子ども20人と保育者4名）がストーリーを作った。あるクラスから出た「困った人を助ける話」という意見を話づくり係りに伝えると、子どもたちも賛同し、「困っている人ってどんなことに困っているのか」という話し合いになった。子どもたちは2学期末にユニセフのペープサートを見た経験から「地雷があって遊べない」「食べ物なくて困っている」という「困った状況」の意見が出てきた。話が決まると年長組全員で学年集会を開き発表した。話の内容が自分達の経験した（银杏屋やユニセフについて学んだ）ことだったこともあり、話づくり係り以外の子どもたちもストーリーをすぐに理解した。

大道具係り（子ども30人と保育者1名）・音楽係り（子ども30人と保育者2名）・衣装係り（子ども20人と保育者1名）もそのストーリーのイメージを掴み、描いたり、作詞したりした。また、全員で作りにあげていくということを大切にするために、学年集会でプレゼンテーションをして、年長組全員で共通理解を図った。自分でやりたいと思って参加している係りだったので積極的に意見を出す子が多かった。また、アイデアもたくさん出てきていた。プレゼンテーションでは、自分達の意見を認めてもらう喜びを経験した。

③配役を決める

4つの係り以外に、この創作劇では全員の子供たちが劇中の登場人物の役を演じるので、まず、自分達がやりたい役を保育者に伝えた。どの役もやりたい子が必ずいたが、困っている人を救う「子どもたちの役」はヒーロー的な存在で人気であり、また困っている人役は、実際

自分達が困った状況を目にしていないうということもあり、どう演じていいのかという不安からか、希望者が少なかった。

④演じてみる

実際に練習が始まってみると、子どもたちは話の流れをよく理解し、自分たちが登場するところを憶え、演じていた。劇中に出てくる歌もメロディーは今まで歌ってきた歌を使ったのですぐに覚えていた。特に「どろんべ役」の登場の曲「ヤンチャリカ」は大変人気があり、舞台袖で待っている子ども達も踊りながら歌うほどであった。

しかし、いざ演じるとなると子どもたちは構えるようで、普段困っている友達に声をかける時のようにはいかず、棒読みになってしまったり、感情が入っていなかったりした子どもが多く見られた。セリフを読むことに必死になったり、台本に忠実になりすぎてしまったりという姿も見られた。初めは通し稽古をしていたが、部分練習を多くするようにして、見ている子どもたちにも「もっとこうすると良くなると思うところある？」と意見を求めるようにした。そうすると、「ここがこうなのはおかしい」「こういう風にした方がいい」「声が小さいよ」とアドバイスをし、見ている側もお客さん目線で考えて、より良いものを作っていこうという様子が感じられた。

⑤自分達の劇を自分達で動かそう

今年は演じるだけでなく、大道具を動かしたり、劇中に使用する音楽（BGM）を弾いてみたり、と上演中の裏方の仕事も自分たちでやってみることにした。仕事の内容は、保育者の方で考えて配置した。ピアノを弾く子どもたちは、劇を成功させようと各保育室のピアノで練習をしていた。また、劇の練習で耳にしている曲ということもあり、自分はピアノ係りではないけれど弾いてみたいという思いが生まれ、劇に使用している曲を弾いて遊ぶ姿も多く目にするようになった。今までは保育者がしていた大道具を動かすことや効果音を入れることも自分たちで行うことで、さらに劇を自分たちで作りに上げていると感じることができ、その仕事も楽しんで行っていた。

⑥子ども会本番

子どもたちは登園してくると、自分の役の衣装を身に着け、劇で使用する曲を友だちと歌ったり、会話したりして、リラックスしている様子だった。演じているときも今まで、友だちや保育者にアドバイスをもらったことを思い出しながら演じており、舞台袖で待っている子ども達も歌を一緒に歌うことで、舞台に出ている子どもたちを応援していた。役を演じることと裏方の仕事を行うということの2つを同時に把握し、自分の出番の前になると積極的に準備をしていた。保育者は、子どもたちが役で舞台に登場する時と、裏方の仕事で出番になるときの少し前に該当する子どもに声をかけるようにしたが、その時には子どもたちは自ら立って、出番を待っていた。

本番後、子どもたちに感想を聞いてみると、「ドキドキした」「緊張した」という意見もあったが、「楽しかった」「面白かった」という意見が多く聞かれ、自分たちで作りに上げた劇という

充足感から、そのような言葉が出てきたのではないかと思った。

（原田）

5. 表現するという事…保育者の援助

劇のストーリーが完成した後、それを生身の人間が演じる「劇」にするためには、保育者のいくつかの援助が必要であった。

まず初めに、子ども達の実際のイメージが湧きやすいように保育者が話の内容のポイントを絞り、その場面を絵にしていった。保育者は、子ども達に場面ごとにどんなことを会話しているのかイメージを膨らませながら聞いていき、子ども達が考えて生み出した言葉を集めていった。場面ごとの台詞がなんとなく決まっていき、イメージが湧いてくると、思い思いに言葉を発しながら体でも少しずつ表現をしていくようになっていった。話の内容が理解でき、場面ごとに言葉を発してみるものの台詞と同時に体で表現するのが難しいところもあった。役ごとに、この場面では嬉しいのか・困っているのかなど喜怒哀楽の表現を考えるよう促した。時間をかけて、保育者が繰り返し言葉で表現を探しながら話し言葉での表現を支えていく必要があった。その後、一つ一つの表現を丁寧にするためにも同じ役の友だちと話し合う場を設けた。そこで、友だちと同じ考えをもっていることを知り、新しい考え方を示してくれる友だちがいたりすることで、自分一人の表現だけではなく友だちと一緒に同じ表現をするようになっていった。自信をもって自分の表現を出している子には、見本となってみんなの前でやってもらい、色々な表現があることを伝えていった。ナレーターがいないので、話の筋の部分の台詞は統一して、相手とのやりとりの部分は個の表現（その場で出てくる個々の台詞）を大切にするようにした。劇あそび（練習）も、学年全体の子どもたちをAチームとBチームの2チームに分けて、お互いの劇を見せ合うことで良い点と改善点に気づきそれを生かしていくようにした。一人一人が自分の役になりきり、自分なりのイメージを持って精一杯自分の表現力でそのイメージを表せるようになっていった。

（相澤）

6. 子どもたちに伝えたかったこと

本来の始まりは、1年の指導計画作成時に、1年間の中間の区切りとなる運動会の年長の見せ場となる「パラバルーン」の競技内容を話し合っていたときに、当時、子どもたちが国の名前を覚えて言い合ったり、調べたりしている姿があったので、それを更に広げていけるよう、「パラバルーンを気球に見立てて、それに乗って行く世界旅行」をテーマにして構成していくことを決めたことにある。

運動会も成功裏に終わり、子どもたちの興味は更に膨らみ、世界のたくさんの国の存在を知っていく中で、貧困などの様々な問題を抱えている国があることに気が付き始めた。保育者で話し合い、楽しいことばかりでなく、実際の世界の問題も伝えていくことで、子どもたちの生活

やそれを聞いて何か感じ、変化するものがあるのではないかと考え、子どもの権利の中の「生きる権利」「教育を受ける権利」「遊ぶ権利」などを元にそれが出来ない子どもたちがいること、また、逆に自分たちはとても幸せな状況にあることを知らせた。子どもたちは、自然に助けたいという気持ちがある生まれ、「食べ物を送ってあげたい」「おうちがいっぱいある国に連れて行ってあげればいい」など、様々な意見を出していた。

また、その頃に幼稚園のイチョウの木から落ちる銀杏を売ってユニセフに送るという活動を、昨年の年長がしていたので、引き続きそれを行い、さらにこの話を深く子どもたちの心に刻んだ。子どもたちはとにかくたくさん売りたいという一心で、保護者の協力もあり、6850円分の銀杏を売ることができ、それをユニセフに送った。

これまでの実際に経験した内容に、子どもたちのこうしてみたいという内容を盛り込み、ストーリーを子どもたちと共に作り、子ども会で表現することで、ご飯粒を1粒残さず食べるようになったり、折り紙を折り終わったらエコ折り紙として再利用したり、空き箱製作をし終わったものを分解してまた使える素材として残したり、おもちゃを大切に使い、壊れても修理をしたり、他には、地球温暖化について調べてみんなに知らせたりと自ら動き出すようになった。

保育者として、世界の状況の良いこと楽しいことばかりでなく、辛いことや実際に起こっている問題に目を背けずに子どもたちに伝えることは勇気がいることであったが、伝えたことにより、子どもたちの心に今自分が周りの人に守られて生きていることへの感謝の気持ち、それが出来ずにつらい思いをしている子がいることを悲しいと感じ、助けたい気持ちが生まれたように思う。それが将来、誰かのために動けたり、自分のできることを探して行動できたりする人になっていく源となってほしいと願っている。

(黒岩)

最後に

幼稚園における教育は、「環境を通して」「幼児期にふさわしい生活で」「遊びを通しての総合的な指導」「一人一人の特性に応じた指導」を行うことになっている(幼稚園教育要領総則)。本稿には、保育者が教育の意図(子どもたちに育てたいこと、経験させたいこと)を持ちながら、子どもたちが主体的に取り組めるよう、いかに環境を整え、援助をしてきたかの一端が示されていると思う。今後も保育者養成校の附設園として、新しい保育方法及び内容に果敢にチャレンジして欲しいと思っている。読者からのご意見やご指摘をいただくことで、さらに本園とその保育者を育てていただきたいと願っている。

(松村)

(2010.10.6 受稿, 2010.11.4 受理)

